

「他の人のために祈る」

聖書の箇所：ヨハネ福音書 17：6～19

<導 入>

先週の礼拝では、ヨハネ福音書17章からイエスのこの地上での最後の祈りについて、お話ししました。この祈りは、「大祭司の祈り」と呼ばれています。旧約時代、大祭司は神様の民を代表して神様の御前に立ち、民たちのためにとりなしの祈りをしました。「とりなしの祈り」とは、他の人のために祈ることです。イエスは真の大祭司として、神様と弟子たちとの間に立ち、弟子たちのために「とりなしの祈り」をされました。先週お話ししましたように、その祈りは三つに分けられます。1～5節はイエスご自身のための祈り、6～19節は弟子たちのための祈り、20～26節はすべての信仰者や教会のための祈りです。今日は、弟子たちのための祈りを取り上げたいと思います。この弟子たちのための祈りは直接的には11人の弟子を指しますが、あらゆる時代の信仰者に当てはまります。

I. 弟子とは

▽イエスはこの祈りのはじめに、ご自分が祈る対象である弟子とはどういう存在なのかを、語られます。それは、私たちクリスチャンのことでもあります。

ヨハネ17：6～10 6節「あなたが世から選び出して与えてくださった人たち」と弟子たちのことを祈られました。つまり「神様が世から選び出して与えてくださった」のが弟子たちであり、私たちクリスチャンです。弟子は、神様からイエスに与えられた最上の贈り物です。弟子たちは、イエスの招きに応じてイエスに従うようになりましたが、イエスはそこに神様の働きを見ておられました。私たちが、今クリスチャンとして生かされている背後には、神様の働きがありました。何かのきっかけがあって信仰を持つこともあります。その場合でも神様の働きがありました。そういう意味で、クリスチャンは神様の贈り物であり、神様の御前で価値ある存在です。しかし、弟子たちの信仰は弱く、乏しいものであったことでしょう。イエスが十字架の道を歩まれる時、全員がイエスを見捨てて逃げ、ペテロはイエスを三度も否認してしまいました。イエスはそのことをご存知でした。それにもかかわらず、イエスは弟子たちを神様からの最上の贈り物として受け止めておられました。私たちも、クリスチャンとして十分な生活をしていないかもしれません。新しく生まれ変わっていない所があり、誘惑に負けてしまうかもしれません。しかしそのような信仰生活を送っていたとしても、イエスを信じる信仰や思いを持っているならば、イエスへの贈り物です。それは、先日の「Word For Today」にありましたように、イエスは、私たちの友としてありのままを見ておられるだけでなく、私たちの可能性のすべても見ておられるからです。兄弟姉妹の信仰の歩みを見て、さばくのではなく、そこに神様の働きを見て、互いに尊重し合いたいものです。クリスチャンは神様の働きの実であり、神様の贈り物という価値があります。

第二に、6節「彼らはあなたのものでした」、9節「彼らはあなたのものである」とありますように、弟子たちは神様のものでした。弟子たちの人生は彼らのものでなく、神様のものでした。私たちの人生も自分のものでなく、神様のものでした。ですから、自分の好き勝手に生きるのではなく、神様とともに日々を過ごします。神様は私たちを愛し、私たちに良くして下さい。その大きなみわざが、私たちのための祈りです。私たちは、イエスによって祈られています。いろいろな人々との交流がなくても、イエスは私たちのために祈って

下さっています。イエスに祈られていると思うのは、何と大きな励まし、慰めでしょうか。それは、イエスが私たちを愛しておられるからです。

第三は、ヨハネ17：10「わたしは彼らによって栄光を受けました」。弟子であることが、イエスの栄光です。私たちがイエスを信じていること自体が、イエスの栄光です。それは、イエスが今も生きておられることのあかしです。

▽弟子の特質は、ヨハネ17：6「彼らはあなたのみことばを守りました」ということと、ヨハネ17：8に示されています。それは、神様のみことばを受け入れ、イエスが神様から遣わされた救い主であることを信じ、神様の言葉を守ることです。弟子たちは、神様の言葉を完全に守ることはできませんでした。それでも、イエスは彼らが神様の言葉を守ったと見て下さいました。私たちにあって、大切なのは神様の御言葉に従って生きようとする事です。イエスが弟子たちを見られたように、私たちも兄弟姉妹をそのように見ることから、とりなしの祈りに進むことができるのです。

II. 弟子たちのためのイエスの祈り

▽イエスは、17章11節から19節で弟子たちのために祈られました。それは、主に①彼らが守られること、②彼らが聖別されること、③彼らが一つとなることの三つです。

①ヨハネ17：11「わたしに下されたあなたの御名によって、彼らをお守りください」。12節「わたしはあなたが下されたあなたの御名によって、彼らを守りました。わたしが彼らを保ったので」。「御名」とは、神様の恵み、神様の愛、神様の性質すべてを指します。イエスはこれまで弟子たちを守り、彼らの信仰を保って下さいました。しかし、ご自分がこの地上から去るとき、神様が彼らを守られるように祈られました。Iペテロ1：5「あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており」。私たちに、神様の守りがあります。その守りの力は、全能の偉大な力です。私たちの身体、生活、人生は、神様の力によって守られています。守りがたとえ自分たちの思いのままではなかったとしても、私たちは神様の御手の中にあり、神様のみこころが為されたと信じることができます。ここで注目すべきなのは、ヨハネ17：15です。イエスは弟子たちが世から取り去られるようにとは祈られませんでした。イエスは悪魔の攻撃だけでなく、あらゆる困難や悩みから逃げるのではなく、それらに打ち勝てるように祈られました。修道院などの世から隔離された社会での信仰生活を望まれました。私たちが神様への信仰を生き抜くのは、生活のごたごたの中、困難の中、病気や挫折の中であると、イエスは祈られました。もちろん、聖書を読み、祈り、神様と交わる静かな時間は必要です。しかし、これが人生の目的のすべてではありません。クリスチャンの人生は、世の困難、問題、悩み、病気の中で生き抜く道です。クリスチャンは世のものではありません。しかし世の困難や問題に真剣に取り組み、それに打ち勝つことが、信仰者の道です。最近、一人の信仰者の生き様が、NHKの番組で取り上げられていました。名前はミネヤン。両親を早くに亡くし、身寄りが無いことから養護施設で育てられました。30歳で精神病院に入院し、30年以上もその病院で生きて来られました。その間にキリスト信者となりました。彼の好きな聖書の言葉は、「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるからです」(マタイ5：9)でした。それは、両親がいないことから、神の子どもとして生きたいという願いからのようです。ところが、60歳の時に不治の病に罹り、入院するようになりました。その人を定期的に訪問している人(Fさん)がおられました。ある時、Fさんがいつも訪問している日に訪問できなくて、翌日に訪問されました。その時、Fさんが訪問できなかったことを詫言ると、ミネヤンは「自分には都合はありません。都合のよい時に来て下さればいいです。私は自分の都合ではなく、神様の都合だけを考えています」と言われたそうです。その後病が進行し、とうとう召されました。63歳でした。数日後、その病院の掃除をしておられる方がFさんのところを訪問されて、ミ

ネヤンの病院生活について話して下さったそうです。病院の中でもめごとがあると、ミネヤンがいるとそれが収まり、平和になったそうです。争いは自分の都合を言うことから始まりますが、彼は自分の都合を言わずに、相手の都合を尊重することによって平和を作り出していました。彼は病氣と闘いながら、信仰に生きていました。私たちは世の生活の中で、神様への信仰を生き抜かなければなりません。イエスの祈りは、私たちが困難や病氣、悩みから逃げないで、それに打ち勝ってほしいということです。

②ヨハネ17：17～19 イエスは、弟子たちが真理によって聖別されるように祈りました。「聖別する」という言葉の原語には、「異なる」「区別される」という意味があります。私たちは、神様を信じない世の人と異なる生き方をしています。物事の見方や、関心事などは、世の人とは違っています。それとともに、この言葉には、「備える」という意味もあります。神様を愛し、神様の言葉に従って生きるために、神様は備えて下さっています。自分の人生や生活を神様に委ねるならば、神様の恵みによって神様を愛し、神様に従って生きる力と愛が与えられます。イエスの祈りは、私たちが神様の恵みによって、神様を愛し、神様に従ってほしいということです。

③ヨハネ17：11「わたしたちと同じように、彼らが一つとなる」とイエスは、祈られました。17：21でも「すべての人を一つにしてください」とあります。「一つ」という言葉には、神様と一つになると同時に兄弟姉妹が一つになることを指します。人は、みな個性があり、異なっています。Iコリント12：13「ユダヤ人もギリシャ人も、奴隷も自由人も」、聖霊によって一つとなりました。かつて聖霊がこの地上に来られたペンテコステの日の後、復活のイエスを信じた人たちは、「毎日、心を一つにして宮に集まり」（使徒2：46）とあるように、人が心を一つにするのは聖霊のみわざです。このイエスの祈りは、この時応えられました。クリスチャンの間でも、教会間でも、教団教派でも、不一致や排他性が見られるのは残念です。違いがあるのは当然ですが、聖霊の導きによって一つとなることができます。イエスの祈りは、みな聖霊の導きによって一つとなしてほしいということです。そこで神様の御名があがめられ、神様の栄光が現わされます。

▽イエスは、弟子たちが置かれている状況や信仰がどのような状態であれ、彼らの存在価値を尊重され、彼らのために祈られました。他の人のために祈る第一歩は、その人の存在価値を認めることです。見下したり、さばく思いではなく、愛が土台です。その上で困難から逃げるのではなく、それに打ち勝ち、神様を愛し、神様に従うように祈るのです。それから神様の言葉に従う結果、聖霊の働きによって争いや不一致が平和に変わり、互いに一つとなるように祈りましょう。オズワルド・テンバーズは、次のように言っています。「とりなしを、個人的な同情をもって神の前にいき、私たちの思いどおりのことを神様に要求することのように、考えてはならない。とりなしは、私たちの主が罪を贖ってくださったから可能になったのである。私の祈りは、執拗に食い下がっただけの祈りではないだろうか。あるいは、神様にとって代った祈りをしていないだろうか。神様との一致、これがとりなしの鍵である」と。私たちは単に同情や憐み、また偏見によって兄弟姉妹のために祈るのではなく、彼らが神様に近づき、神様を愛して、神様とともに生きるように祈りたいものです。その兄弟姉妹に対する願いやこうなってほしいという自分の期待を神様に要求するのではなく、その人が神様に従う歩みができるように祈りたいと思います。

ヘブル7：24、25 イエスは十字架にかかって死なれましたが、復活され、永遠に生きておられます。そして私たちのために、とりなしをしておられます。この章のイエスの祈りは、今も私たちのために続いています。私たちは、信仰の戦いを一人で闘っているではありません。どんな苦しみを背負っていたとしても、イエスが私たちのためにとりなしの祈りをささげておられることを忘れてはなりません。このイエスの祈りは、私たちに勇気と慰め、クリスチャンとして生きる強さを与えてくれます。それで私たちは、他の兄弟姉妹のためにとりなしの祈りをしましょう